〈交流学習事業〉

ノコギリガザミの中間育成法と資源管理

1．目　的

宮古地域では、古くからノコギリガザミが採捕されてきた。生息場所も入り江湾、与那覇湾、大浦湾、島尻マングローブ、下地水道域等で生息場所としても多くの適地がある。しかし近年になって水産資源の枯渇が叫ばれているが、ノコギリガザミも同様に生息数が減少している。

宮古支庁と下地町では、平成10年度から本格的な放流事業を始め、平成10年は16,000個体の放流を行うに至った。しかし平成11年は歩留まり３％台と低く、中間育成の歩留まりは安定していない。中間育成の歩留まり向上は、ノコギリガザミの放流で最大の問題点となっている。

そこで今回は日本栽培漁業協会でノコギリガザミの種苗生産を行っている浜崎氏を招き、中間育成だけにとどまらずガザミの栽培漁業に関して講義していただくことを目的に交流学習会を開催した。

2．実施年月日・場所

平成12年２月14日

交流会　　15：00～18：00

下地町農村環境改善センター

現地指導　９：00～12：00

下地町入り江湾

3．講　師

日本栽培漁業センター八重山事業所

浜崎克之

4．対　象

平良市漁協下地支部・伊良部町漁協組合員

5．実施状況

日本栽培漁業協会八重山事業所でカニの種苗生産を担当されている。浜崎克之氏を招きガザミの栽培漁業について交流学習会を開催することとなった。平成10年から放流を行っている下地町と、本年度から放流を開始した伊良部町の漁業者・町職員がきて熱心に学習会を行った。

学習会ではまず、浜崎氏の行っている種苗生産について説明があり、

(1) 貧栄養の餌を与える事による脱皮不良の改善

(2) エルバージュ浴によるビブリオの殺菌

など、新しい技術を導入することにより、今まで安定していなかった種苗生産量が本年度以降100万尾程度生産可能であることが説明された。

続いて中間育成に関しては、平成10年度に行った中間育成の結果がよかったので、その方法で続けていくようにとのこと。しかし現実には当時使っていた網がもう無く、新しく用意する網も当時使っていた大型（25～26ｍ）の網では重く作業性が悪いなど問題点がいくつか挙げられた。

また、栽培漁業は放流効果調査を継続して行うことが重要で、その方法についても説明があった。そのためにはまず現在の資源量の推定が重要であり、次年度以降日本栽培漁業協会も重点的に入り江湾で調査を行うとのことであった。浜崎氏の話によれば、入り江湾は調査対象地域として大きさも手頃で、漁をしている人もわかっているので非常に適しているとのことであった。

本年度から操業日誌を漁業者に付けてもらい、漁獲量の把握を努めるとともに、カゴを大量に設置し捕獲調査を行う事も話し合われた。

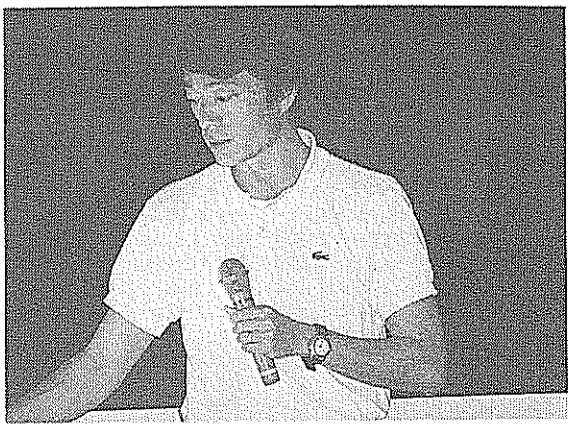
交流会終了後は懇親会が行われ、講師・漁業者一緒になり、宮古島特有のオトーリを回し、次年度以降の放流の成功を祈願した。

翌日は入り江湾に船を出し現場調査・指導を行った。入り江湾は小型ガザミの生息場所・大型の生息場所がかなり明瞭に分かれているとのこと。また、小型ガザミの放流場所を3ヵ所ほど探し、次年度以降の放流候補地とした。また、下地町が独自で行っているガザミの資源量調査については

1．籠網を延縄方式でつなぐ方法を採る

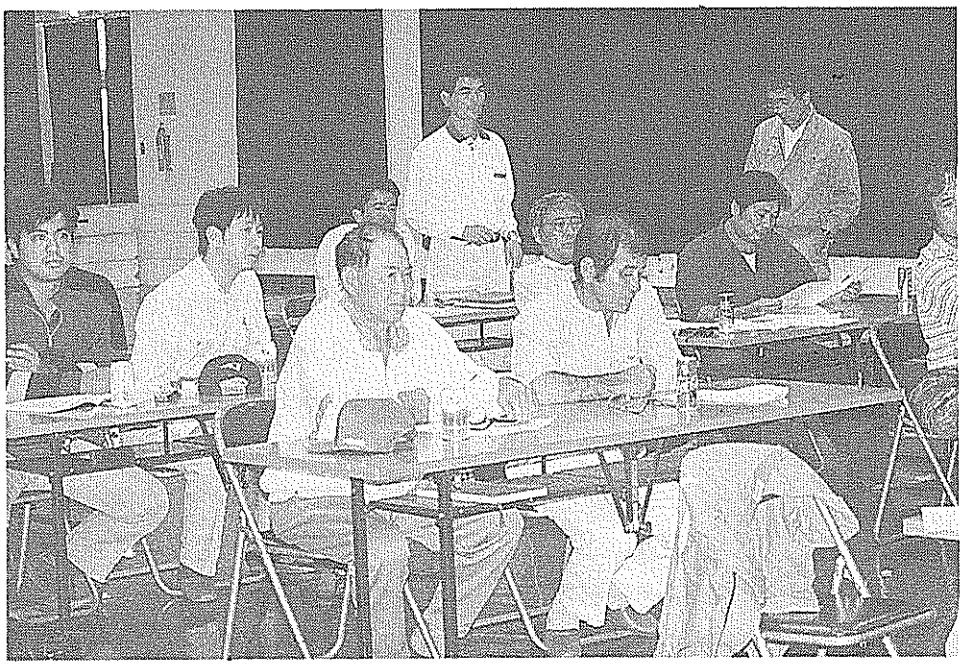
2．籠数を増やし調査の精度を上げる

等の指摘を受けた。



講師：浜崎活幸氏（日本栽培協会八重山事業所）

栽培漁業に関する講義



多くの質問が出された